国立大学附置研究所・センター会議
Japan Council for Research Institutes and Centers of National Universities

文部科学省と国立大学附置研究所・センター　個別定例ランチミーティング

第113回　京都大学　人文　科学研究所（2025.4.25)

12:05－12:10(5分）　：研究所・センターの概要
12:10－12:25(15分）：「つなぐ」研究
人文研で古今の中国美術をつないでゆくこと
呉 孟晋　准教授
12:25－12:45(20分）：質疑応答

京都大学人文科学研究所の概要と活動

人文科学研究所長
森本　淳生

1.　沿　革

- 国策研究所から京都大学附置研究所へ
  - 東方文化学院/東方文化研究所（外務省）
  - ドイツ文化研究所（民間）
  - 人文科学研究所（京都大学）

- 京都大学人文科学研究所（1949年）
  - 附属東洋学文献センター設置（1965年）
  - 漢字情報研究センター（2000年）
  - 東アジア人文情報学研究センター（2009年）
  - 人文情報学創新センター（2023年）

- 共同研究の開始
  - 漢籍会読
  - 文学研究
  - フィールドワーク

  人文学と自然科学の融合
- 直轄研の母胎
  - 国立民族学博物館
  - 国際日本文化研究センター

2022/3/9　京都アカデミックブリッジ
（日文研・京都新聞社）

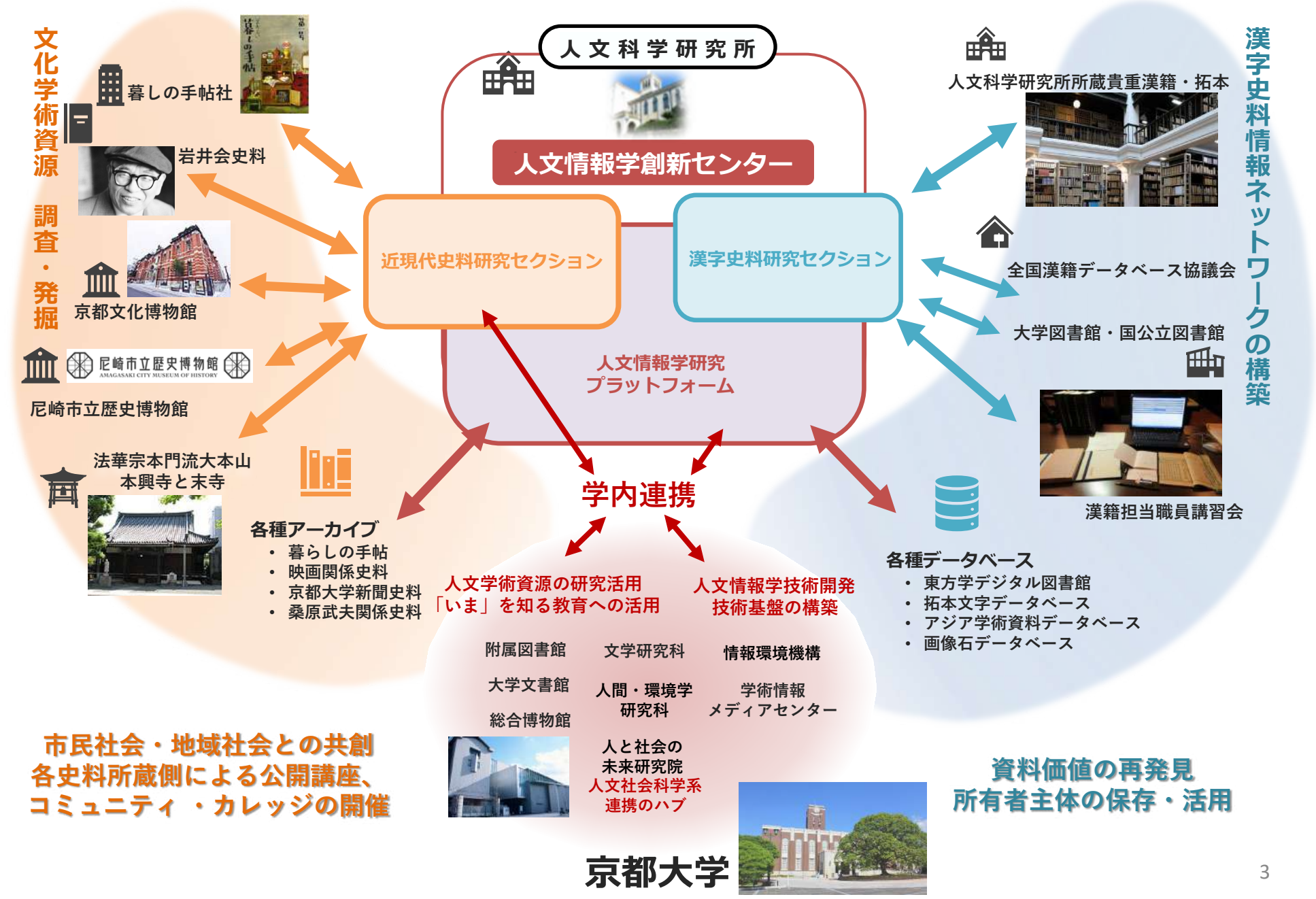
共同利用・共同研究拠点（2010年）
「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」

*2025年4月1日在籍者

教授 22/准教授 16/助教 11/特定准教授 1/特定助教 3

京都大学白眉研究員 5/人文学連携研究者 1

学内・学外（大学・諸機関・市民セクター）との連関にもとづく学術資源の研究と発信



2. 人文研の活動

（1） 共同研究

- 共共拠点事業としての課題公募型共同研究（R7年度 9件）
- 人文科学研究所伝統の小規模頻回共同研究（R7年度 26件）

（2） 教育活動

- 研究科での授業担当・学生指導

  （文学研究科, 人間環境学研究科, 経済学研究科, 情報学研究科, アジアアフリカ地域研究研究科）

- 学部新入生向け少人数ゼミILASセミナー
- 共同研究班における大学院生、若手研究者の指導

  （R5年度: 大学院生のべ1149名、若手研究者(35才以下）のべ1490名が参加）

（3） 社会貢献

- 一般向け公開講座、他機関との連携講座（R5年度 20回開催）
  - ✓ 人文研アカデミー: 人文研の主催する公開講座、シンポジウムなど
  - ✓ Kyoto Lectures：フランス極東学院、イタリア東方学研究所と共催（月例）

- 京大人文研東方学叢書(臨川書店より既刊11冊)

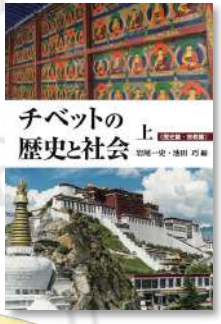
2-1. 共同研究――方法論の伝統と継承

- 共同研究の「草分け」
- 設立以来の方法論である3つの柱を軸とした共同研究

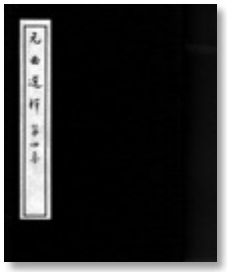
高木博志　編
『近代京都と文化:「伝統」再構築』
2023年（令和5年）

桑原武夫
18世紀フランス研究
『ルソー研究』
1951年（昭和26年）

岩尾一史・池田 巧（編）『チベットの歴史と社会』上下、
2021年（令和3年）

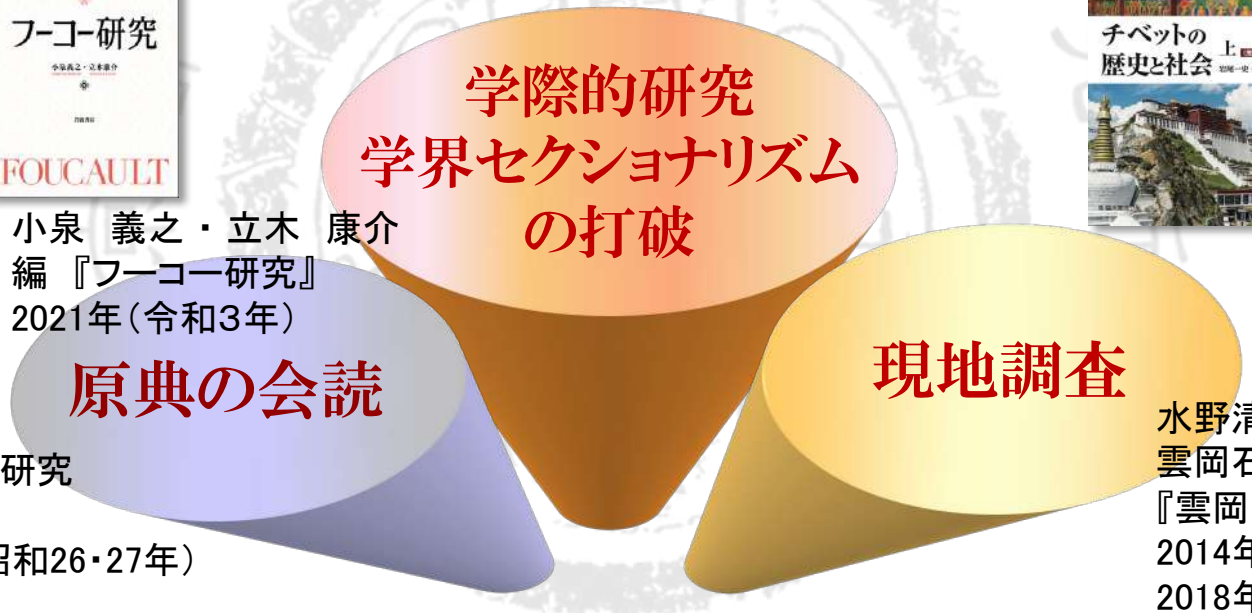


小泉　義之・立木　康介
編 『フーコー研究』
2021年（令和3年）



吉川幸次郎
元代雑劇の研究
『元曲選釋』
1951・52年（昭和26・27年）

水野清一
雲岡石窟調査
『雲岡石窟』中国語版
2014年（平成26年）ー
2018年（平成30年）



2-2. 共同研究班――視角からの分類

世界的視座から文化の創成・接触・変容を研究

３つのコンセプト

テーマ1　文化基盤の形成

■中国生活文化の思想史
■日本語史研究方法論の深化・刷新
■上古中国における書写の解明：戦国楚簡を中心に
■中国社会経済制度の再定位
■秦漢法制史料の研究
■東方文化研究所旧蔵漢籍の整理と研究
■東アジアの宗教美術と社会
■文化資源と文化運動
■古典中国語コーパスの応用研究
■隋唐石刻資料の研究
■『玉燭宝典』研究
■『広弘明集』に見る中国中世在家仏教
■日本近世における幕領社会の研究
■中国近世の文学理論と表現の技法

テーマ2　接触とコンクリフト

■中日の近代哲学・思想の交差とその実践
■漢語・非漢語史料に基づく内陸アジア古代交通の社会・経済基盤
■子どもの基地被害に関する歴史的研究－1950年代の多摩地域に着目して
■記憶と身体の人文科学―非言語媒体の表現による体験的記憶継承の可能性を求めて
■アジアにおける宗教諸文化の越境的波及と「地域」創出
■交流と相克のユーラシア東方史
■「異端」の人文学
■チベットにおけるコミュニケーションツールの研究―書簡文化の歴史的変遷と現代的意義―
■高等教育機関における労働組合活動の史的研究

テーマ3　地球社会と共存

■「日本のアジア主義」再考
■満洲語檔案に記録されたユーラシア中央域の世界
■近世・近代の姓氏や戸籍を巡る学際的研究
■ポスト=ヒューマン時代の基点としてのフランス象徴主義
■漢籍共同研究システムの構築
■モノ・知識・環境
■高度経済成長期の生活史
■東アジア伝統科学における自然と人間
■地球科学構想と19世紀ロシア社会
■情報と近現代中国
■トラウマ概念の系譜再考―学際的探求によるトラウマ研究のアップデート
■沖縄県南城市の歴史・民俗資料の調査と分析

（赤字は課題公募班）

2-3. 共同研究班への参加者(2023年度延べ人数)

413回開催した研究会の延べ参加者

区分	延べ人数			
京都大学	3,000人	うち、外国人研究者 1,472人	うち、若手研究者（35歳以下） 1,490人	うち、大学院生 1,149人
国立大学	972人			
公立大学	299人			
私立大学	1,615人			
大学共同利用機関法人	77人			
独立行政法人等	89人			
民間機関	169人			
外国機関	665人			
その他	224人			
合計	**7,110人**	**（うち、女性研究者　2,442人）**		

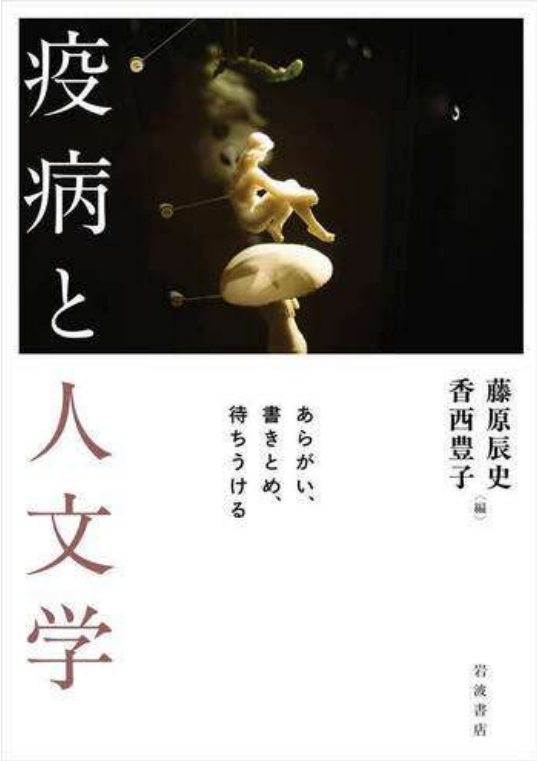
3. 国際連携

- アジア、ヨーロッパからの研究者、学生の受け入れ
  - 招へい研究員　6名
  - 招へい外国人学者　13名
  - 研究生　13名
- 外国研究機関との緊密な連携
  - フランス国立極東学院
  - ハーヴァード燕京研究所

  など16機関と学術交流協定
- 国際共同研究への参加
  - フランス国立科学研究センター,フランス社会科学高等研究院
  - オクスフォード大学

4. 新しい時代の人文科学へ

ポスト・パンデミックの世界をどう生きるか？

『疫病と人文学』（香西豊子・藤原辰史編、岩波書店、2025年）

1. **文理芸融合**という方法
   自然科学系や人文学系の研究者と、世界的に著名な写真家（新井卓氏）が3年間議論し、コロナ禍が社会に与えた根源的影響について意見を交わしたこと。
2. 歴史が現状分析に**役立つ**ことを示した点
   疫病史の研究が、コロナ禍の特徴と変化のより明確な理解をもたらすことを示したこと。
3. 新時代の**政策構想**を示した点
   次のパンデミックに向けて、政治、経済、福祉、医療、宗教などの分野において、どんな準備や思考が必要かを示したこと。